

主な論点の整理について

1. チーム医療の推進に係る基本的な考え方

- (1) なぜ、今、「チーム医療」なのか。
- 質が高く、安心・安全な医療を求める「患者・家族の期待」の一層の高まり
 - 医療業務の飛躍的な増大・複雑化に伴う「医療現場（医師）の疲弊」
 - 医療専門職の知識・技量の高度化
 - ガイドライン・プロトコール等を活用した「治療の標準化」の浸透
 - その他
- (2) チーム医療の取組がもたらす効果を、どう考えるか。
- 早期対応・回復促進など「医療の質の向上」
 - 医療の効率性の向上による「医療従事者の負担の軽減」
 - 専門性の発揮等による「医療現場の活性化」
 - 医療の標準化等を通じた「医療の安全の向上」
 - その他
- (3) チーム医療を推進する上で今後目指すべき方向を、どう考えるか。
- 各医療専門職の業務範囲の拡大と協働の推進
 - 追加的教育・修練を受けた高度な医療専門職の活用
 - 複数の医療専門職による医療チームの領域の拡大
 - その他

2. 看護師の役割の拡大

- (1) 基本的な方針について
- 大学における看護師養成の急増等による教育水準の全体的な高度化、専門看護師・認定看護師の増加、看護系大学院の整備の拡大等を背景に、看護師の役割を拡大（裁量の拡大、業務範囲の拡大等）すべきとの指摘があるが、その基本的な方針について、どのように考えるか。
 - ① 高度な能力（知識・技術等）を備えた看護師の役割を拡大する
 - ② 一般の看護師の役割を拡大する

- ③ ①・②を併せて拡大する
- ④ その他

(2) 高度な能力を備えた看護師について

仮に、高度な能力を備えた看護師の役割を拡大する場合、例えば、以下のような論点が想定されるが、各論点についてどのように考えるか。

- 高度な能力を備えた看護師に対して業務範囲の拡大を認める場合、具体的にどのような業務が考えられるか。例えば、以下の分野について、それぞれどのような行為が考えられるか。
 - ・ 急性期（外来、入院）
 - ・ 慢性期
 - ・ 在宅医療
- 高度な能力を備えた看護師が業務を実施する際の医師との関係について、どのように考えるか。
 - ① 医師の指示無く、医師から独立して実施
 - ② 医師の包括的指示を受けて実施
 - ③ 当面は医師の包括的指示を受けて実施することとし、実績を積んだ上で、医師から独立して実施することの是非について検討
 - ④ その他
- 高度な能力を備えた看護師の要件について、どのように考えるか。
 - ① 臨床経験
 - ② 養成課程（大学院修士課程、研修機関等）
 - ③ 認定試験
 - ④ その他
- その他、関連する以下の事項について、どのように考えるか。
 - ・ 高度な能力を備えた看護師の認定主体等、認定制度の在り方
 - ・ 「高度な能力を備えた看護師」の名称
 - ・ その他

(3) 一般の看護師について

- 仮に、一般の看護師の役割を拡大する場合、一定の業務範囲の拡大が想定されるが、例えば、どのような行為が考えられるか。

(4) その他関連する課題

- 上記に関連して、外科関係者の間では、米国の「フィジシャン・アシスタント」(PA)を参考に、医師の監督下において、手術室内の医療行為（開閉胸等）等を含め、主として周術期における外科医の診療の補助を実施する職種を導入すべきとの指摘があるが、このような指摘についてどのように考えるか。

3. その他のメディカルスタッフの役割の拡大

(1) 薬剤師

- 医療安全の確保、医師・看護師の薬剤管理等に関する業務負担の軽減の観点から、薬剤の専門家である薬剤師の活用は非常に有益との指摘がある一方、病棟等において十分に活用されていないとの指摘もある。
- このような状況を踏まえ、チーム医療の観点から、例えば、こういった業務を実施することが有益か。また、薬剤師の活用の促進に向けた具体策について、どのように考えるか。
- さらに、平成 18 年度から薬学教育 6 年制が導入されているが、今後、薬剤師が担い得る役割についてどのように考えるか。

(2) その他のメディカルスタッフ

- 医療技術の高度化に伴い、医療安全の確保や医師・看護師の業務負担の軽減の観点から、各種治療や検査の実施に当たり、専門的な知識を有するメディカルスタッフが関わることの重要性が指摘されている一方、医療現場においてメディカルスタッフが十分に活用されていないとの指摘もある。
- このような状況を踏まえ、例えば、検討会で指摘されたような以下の職種に関する役割の拡大について、それぞれどのように考えるか。

【職種の例】

- ・ 管理栄養士
- ・ 言語聴覚士
- ・ 作業療法士
- ・ 診療放射線技師
- ・ 理学療法士
- ・ 臨床検査技師
- ・ 臨床工学技士
- ・ 医療ソーシャルワーカー、医療リンパドレナージセラピスト、細胞検査士等

(3) 事務職員（医療クラーク等）

- 書類作成等の事務作業が多く、医師が疲弊しており、また、患者としては書類が渡されるまでの待ち時間が長いなど、患者へのサービスが低下しているとの指摘がある。
- このような指摘について、例えば医療関係事務に関する処理能力の高い事務職員（いわゆる医療クラーク）を積極的に導入することが想定されるが、導入の促進に向けた具体策について、どのように考えるか。

(4) 介護職員

- 在宅医療を推進するため、看護師の負担軽減や患者・家族へのサービス向上の観点から、例えば、介護職員も一定の医療的ケアを実施できるよう検討すべきとの指摘があるが、この指摘についてどのように考えるか。

4. 多職種連携の推進

- 院内横断的に患者の治療に当たるチームとして、例えば以下のようなチームの活用が進められているが、より一層の推進に向けた具体策について、どのように考えるか。

【チームの例】

- ・ 栄養サポートチーム（NST）
 - ・ 感染制御チーム（ICT）
 - ・ 緩和ケアチーム
 - ・ 口腔ケアチーム
 - ・ 呼吸サポートチーム（RST）
 - ・ 摂食嚥下チーム
 - ・ 褥瘡対策チーム
- 院内助産所の設置等、助産師の専門性を活かした産科医との連携が進められているが、より一層の連携の推進に向けた具体策について、どのように考えるか。
 - 在宅医療の場面においては、医師、看護師、薬剤師、歯科医師等の連携が重要との指摘があるが、連携の推進に向けた具体策について、どのように考えるか。
 - 多職種連携を推進している医療機関が、医療現場（患者や他の医療機関等）において認知されるための具体策について、どのように考えるか。